

小 論 文

2024 年度（令和 6 年度）

入 学 試 験 問 題

受 験 番 号	
---------	--

注 意 事 項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) この問題冊子は 2 ページあります。問題は 1 問です。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- (3) 問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (4) 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
- (5) 問題冊子のどのページも切り離してはいけません。
- (6) 辞書機能や計算機能、通信機能等をもつ電子機器類全ての使用は禁止します。
使用している場合は不正行為とみなします。
- (7) 試験終了後、解答用紙は持ち帰ってはいけません。この問題冊子は持ち帰ってください。

問 次の文章を読み、下線部(1)について、本文全体の主張を踏まえた上で、あなたはどのように考えるか 800 字以内で述べなさい。

われわれはめいめいそれほど違ったことをしているのではない。だれでも朝起きて、食事をして、仕事に出かけて、夜になれば寝る。読むものにしても、ほとんどの人が新聞を読んでいるが、その新聞も似たりよつたりのものである。テレビになるとさらに変わりばえのしないものをみんなが見ている。それなのに、個人によって、ものの見方、感じ方が大きく違っている。生活を構成している要素そのものはあまり違わないのに、まとめた全体の結果はひどく違うのである。

われわれの人生は雑誌編集を思わせる。かりに、二人の編集者が同じ原稿をもとにしてそれぞれの雑誌を作るとしよう。相談しないかぎり、かならず違った誌面になる。同じ原稿を使っても、いかにもおもしろそうな目次づらになるかもしれないし、反対に、地味で見栄えのしない配列にするかもしれない。何をどのように並べると、ポアンティイスム*のような効果があらわれるか、理屈はわからなくても老練の編集者なら勘で知っている。その勘がエディターシップである。

エディターは自分で原稿を書かなくていい。ほかの人に頼んだ原稿を全体にまとめる能力が求められる。料理の腕である。かつては編集はノリとハサミの仕事だといわれた。それは二次的創造に気付かない時代のことである。おそらく、そういう時代では料理の価値も本当にはわからなかったに違いない。

われわれは毎日、自分の一日という雑誌を編集しているようなものである。部分のひとつひとは外部から与えられたり、押しつけられたり、他人のものを借りたりしているのだが、それに順序をつけて、一日の中へ収めるエディターシップにおいては独創的であり、個性的でありうる。いかなる人も他人とまったく同じ一日を過すことはできない。

それが実り多き一日になるか、ただ夢のように消える一日になるかは、同じ材料を使ってもおいしい料理になるか、ならぬかが分れるのによく似ている。

一日一日がひとつの雑誌であるばかりではなく、一月も一年もやはりそれぞれに雑誌である。われわれは一生かかって、きわめて複雑で大きな雑誌を編集しているのだともいうことができる。自分では何ひとつ新しいことをしなかったと思っても、知ら

ず知らず人生を編集することで、りっぱな創造をしている。こういう創造をしていない人はいない。ただ、それに気付いているかどうかである。

本を読んですぐれた思想や新しい知識に触れる。それをわがものにして、日常に生かしていく。一見まったく模倣のように見えるかもしれないが、これも目に見えない二次的創造、エディターシップである。われわれは自覚しないところでずいぶん創造的⁽¹⁾なのである。

(外山滋比古『知的創造のヒント』による)

*ポアンティイスム——点描主義。新印象主義を基礎づけるディビジヨニスム(分割主義)の主要な技法。斑点を画面に並べることで、斑点が混ざり合って見え、別の色彩のかげりを帯びながら、より輝きを増すことを目的とする。